

# 稲作と舞踊(1) —中国山地の「囃子田」を 事例として—

本田 郁子  
中野 祐子

## 1. 研究目的

本研究は、稲作地帯に伝承される芸能、特に舞踊の運動特性と表現様式とを明らかにし、芸能とその伝承基盤である社会との関係を探ることを目的とする。日本の古典舞踊の動作が稲作農耕の動作と関わりが深いことはこれまで指摘されてきているが、稲作地帯に伝承されている民俗舞踊や民俗芸能についての運動学的な研究は少なく、これらの身体運動としての特性を明らかにする必要があると思われる。また、稲作社会では舞踊や芸能を媒介としたコミュニケーションが頻繁に行われており、現代社会におけるコミュニケーションの不足や歪を解決する糸口として、その機能にも着目すべきと考える。

今回は、中国地方に伝承される「囃子田」を事例に、芸態分析から芸能の表現構造と運動特性を実証し、今後の芸態比較や芸能と社会との関係を探るための基礎資料を得ることを目的とした。

## 2. 研究方法

文化人類学や民俗学の手法を参考に現地調査を行い(下表・下図参照)、現地地で得られた芸能の記録や情報を元に芸態分析と情報整理を行った。芸能の収録と分析にはVTR, スチール写真, 録音, VTRプリンター等の機材を使用した。

表 現地調査一覧

年月日	場 所	対 象
1985. 6. 9	広島県広島市・縮景園	新庄の囃子田・南条踊
1986. 6. 1	広島県山県郡千代田町壬生	壬生の花田植
1986. 6. 8	広島県広島市・縮景園	新庄の囃子田・南条踊
1986. 7. 13	島根県那賀郡三隅町井野大谷・大谷八幡宮	三隅の田ばやし
1986. 7. 27	島根県那賀郡三隅町井野上今明・神野宮	三隅の田ばやし
1987. 6. 7	広島県山県郡千代田町壬生	壬生の花田植
1987. 5. 17	広島県山県郡大朝町大朝	新庄の囃子田
1987. 6. 14	広島県広島市・縮景園	新庄の囃子田・南条踊
1987. 7. 12	島根県那賀郡三隅町井野大谷・大谷八幡宮	三隅の田ばやし
1987. 7. 19	島根県那賀郡三隅町井野上今明・神野宮	三隅の田ばやし

図 調査地の位置



## 3. 結果及び考察

### (1) 中国地方における囃子田について

中国地方では、田植時に歌を歌い、舞踊的動作を伴いながら太鼓などの楽器を打ち鳴らして囃す芸能を一般に「囃子田」または「田囃子」と呼んでいる。『栄華物語』などによると、京都周辺ではすでに平安時代に、現在の囃子田と同じような形態で田植が行われていたことが伺える。中国地方での囃子田の起源は中世に遡るといわれ、江戸時代中期に書かれた歌本が最古の記録として残っている。明治・大正と伝承されてきた囃子田は田植方式の変化のために昭和初期には次第に衰退し、戦後には大地主の没落や農作業の合理化に伴って保存行事以外ではほとんど行われなくなった。

日本では中国山地にのみ現存する囃子田は、その形態から、東側の備後備中系のもものと西側の安芸石見系のものに大きく分類されている。本研究では、文献調査・予備調査の結果から安芸石見系のものに対象を絞り、演者が地元住民であり観光化されていないこと、稲作行事に関連した芸能が囃子田以外にも伝承されている地域であることを考慮して、山陽側・安芸地方の代表として広島県山県郡大朝町新庄の「新庄の囃子田」、山陰側・石見地方の代表として島根県那賀郡三隅町井野の大谷と上今明に伝わる「三隅の田ばやし」を対象として選んだ。

### (2) 「新庄の囃子田」の概要

新庄の囃子田が伝承される広島県山県郡大朝町新庄は、島根県との県境の盆地にあり、稲作を中心に農林業を営む地域である。中世には吉川氏の城下町として栄えた。新庄の囃子田は昭和3年頃結成された保存会によって伝承されている。

昭和62年5月17日に大朝町大朝の水田で、大朝町春祭りの一行事として行われた新庄の囃子田を概観すると、囃子方はまず、田の神を迎える「さんばい降し」の儀式に始まり、次いで華やかに飾られた牛にすきを引かせて田を耕す「代かき」が行われる。田を均して田植の準備ができると、さんばい(音頭・ささら)、早乙女、太鼓・小太鼓・笛・鐘の囃子方が道行で水田に向かう。実際の田植は早乙女が行い、その後ろで囃子方が楽器を演奏する。(写真1)中休みにホウの葉で包んだ握飯を水田の中で食べ、再び田植を始める。田植が終わると近くの小川で手足を洗い、囃子田は終了となる。

### (3) 「三隅の田ばやし」の概要

三隅の田ばやしは伝承される島根県那賀郡三隅町井野の大谷と上今明は、山あいにある戸数50戸足らずの小さな集落で、主に農林業を営む地域である。この地域の田ばやしは青年団によって伝承されてきたが、戦後中断し、昭和50年頃二つの集落でそれぞれ保存会が結成された。昭和57年の国

民体育大会を契機に二つの保存会が合併して「三隅の田ばやし保存会」となり、現在に至っている。保存会結成前は田植時に水田で行われていたが、現在では祭祀芸能として神社で上演されている。

昭和62年7月12日に三隅町井野の大谷八幡宮境内で行われた三隅の田ばやしを概観すると、演者はまず集会所に集合し、次に道行で神社に向かう。神社では初めに拝殿に向かって「神参り」という演目を行う。次に円形になって円周上に太鼓、円の中に拍子木・小太鼓・ささら・胴頭（太鼓のリーダー）が並び、途中休憩を入れながら数回の演目を行う。（写真2）最後に「びわ送り」という演目を演じて終了となる。

#### （4）二種の囃子田の芸能分析

囃子田の田唄の文学的・音楽的研究あるいは囃子田の民俗学的研究の成果は、これまで報告されてきている。本研究では、これまで客観的・実証的な研究が行われていない囃子田の身体表現について、特に太鼓を中心に構造分析と運動分析を行った。二種の囃子田の芸能分析を、両者の共通性と相違性についてまとめてみると以下のような結果が得られた。（発表資料の図表参照）

まず、二種の囃子田の芸能の共通性をあげる。全体構成については、①道行で入場し神事に続いて囃子田を行う、②一曲ごとに合い間を入れながら上演する、③一曲目の上演時間が長く最後の曲が長い、④一人のリーダーが全体の進行を制御する、⑤囃子方は全員が男性で太鼓の人数が最も多い、という点があげられる。歌については、⑥歌の基本構成は三部構成である、⑦二つのグループの掛け合いで歌われる、⑧伝承されている歌詞の中からリーダーがその場にふさわしいものを選択する、という点があげられる。太鼓のフレーズに関しては、⑨太鼓のフレーズに名前をつけて伝承している、⑩複数のフレーズが組み合わせられて一曲が構成されている、という点があげられる。また動作分析からは、⑪下肢をくの字に曲げて重心を落とした姿勢が基本姿勢である、⑫下肢と太鼓をほとんど動かさず上半身を大きく動かす、⑬目線は揆の方を向く、⑭前述の基本姿勢の保持が技

術的ポイントとして練習の目標になっている、という点が確認された。

次に、二種の囃子田の芸能の相違性をあげる。全体構成については、①新庄は田植作業と同時に水田の中で行い列隊形で行われるのに対し、三隅は神社の境内で主に円隊形で行われる、②新庄は三隅に比べて役割の種類が多く、歌と楽器の演者が分業化されているのに対し、三隅は全員が歌も楽器も奏する、という点があげられる。一曲の構成については、③新庄は一曲の上演時間が長く、太鼓のフレーズの時間は長いがその構成は単純でテンポも一定であり、三隅は一曲の時間が長く、太鼓のフレーズの時間は短いがその構成は複雑でテンポも変化する、ことがあげられる。動作の特性については、④新庄は三隅に比べて上半身の動きが大きい、⑤新庄には揆を投げ上げる、揆を指先で回すという高度な技があり、三隅には首と肘とを曲げ体の各部位でくの字をつくる動作が入る、というそれぞれの特徴が認められた。

#### 4. 結論

以上の芸能分析から、まず安芸石見系囃子田の太鼓の舞踏的動作の特性については、下肢をくの字に曲げ重心を落とした姿勢が基本姿勢であること、下半身を動かさずにこの姿勢を保持し上半身を大きく動かすことが特徴として確認された。また表現構造については、新庄は全体を制御する役、歌を歌う役、楽器を演奏する役とに分業が進み、それぞれ専門に担当する歌や太鼓の技法が高度化して「高度な技で見せる芸能」、三隅は分業が進んでおらず、技は高度ではないが要素が組み合わせられた構造は複雑で変化に富み「構造のダイナミクスで見せる芸能」とであるという異なった二つの表現システムを見出すことができた。これらの表現システムの違いは、芸能におけるコミュニケーション・システムや日常生活でのコミュニケーションの違いに関与していると推察された。（この研究の一部は、昭和62年度文部省科学研究費奨励研究（A）「稲作社会における舞踏表現」によるものである。）



写真1 新庄の囃子田



写真2 三隅の田ばやし